

天の川比翼塚物語

広電沼田営業所から奥畑行きバスに乗って約十分ぐらいの所に大曲バス停があります。そこで降り山にそって二百メートルくらいで久保橋を渡ります。

この辺りの川の名を土地の人達は天の川と呼んでいます。そして橋のたもとから約十メートル程歩いて右手の届く程の所に田の畔に立てかけて高さ一米足らず幅三〇センチ程の石碑を見ることが出来ます。

此の石碑は供養塔ですが大変悲しい物語が秘められています。

まあきいてください！

昔此の近くに若い夫婦者が住んでいました。亭主は茂平と言い女房はお新といいました。

茂平は親の代からの貧乏暮らしながら町便を業として生活していました。

女房のお新と茂平は幼なじみで愛し合って一緒になりました。

茂平が二十一、お新十八で二人とも正直もので近所の人達にも可愛がられてとても人気ものでした。

ある年の夏例年になく雨が多くその日も朝から雨でした。

茂平は町便の用事を沢山頼まれました、新しい草履を足に天秤棒を肩にお新に見送られて雨の中を出てゆきました。頼まれた用事は多かったが殆ど天満町堺町で調達出来ました。

その頃は広島を中心は堺町、天満町だったようです。

帰り道重い荷物を天秤棒に已斐峠を越すのは一苦労でしたが、若い茂平にはそれも苦にならず日の高い中に峠を越えました、石内の原田半坂をすぎて大塚にかかる頃から青空さえ見えて来ましたが、前原から専念寺の高い屋根を望頃から又雨は激しくなってきました。奥畑まで一里たらず雨宿りもせずお新の笑顔を少しでも早く見たい一心から疲れた足をふみしめて飛び石の渡し場迄帰りました。お新の待つ我が家はすぐそこです。

川を見ると水嵩が増えて濁った水は本馬のように飛んでいました。しかしこの飛び石は常日頃から通いなれていますので此位の水は何のそのとばかり飛び石の上に足を乗せたと思う間もあらばこそ濁流に足をとられあつと言う間に濁流に吞まれてしまいました。

雨の上がった夕刻茂平の死体は一キロ位下流の琴平宮の川岸で発見されました。

残されたお新は身も世も嘆き悲しみましたが、これも前世の約束とあきらめて一生懸命に働いて茂平との楽しかった思い出を胸に供養の明け暮れでした。

しかし世間の風は冷たく茂平の一周忌も経たぬのに早くも上地区の農家の二男坊の嫁にと顔役を仲に立てて強く申し込んできました。

村の若者からの愛のささやきに返事に困る事もありました。引く手あまたのお新でしたがこんな話には一切耳を傾ける気はありません。

茂平の一周忌です。縁者や親しいかつた人達を招いて仏事もしめやかに済ませました。

この日も朝から雨が降り続いていました。

川の水嵩は増して茂平の流された一年前のように無気味に濁った水が流れていました。お新はいつか流れに添って飛び石の辺りにたたずんでいました。

お新は流れの中に茂平の微笑みかける姿を見ました。

それから数時間が過ぎました。

近所の人はお新の姿が見えない事に気づきました。

或いはと飛び石の渡し場に来てみると、お新が初めて茂平から買って貰ったと言っていた赤玉の簪が傍の石の上に供えるように置いてありました。

葬儀を済ませた地区の人達は若い二人の死を哀れに思い飛び石の渡し場の両岸に二人の供養碑を建てねんごろに其の霊を慰めると共に清めの祭を行いました。

これは洪水を無くし、秋の収穫を祈り、百姓の生活が無事平穏でありますよう、川の神様と天の神様を祭る百姓の祭でもありました。

そして茂平の一周忌にお新が後を追った日こそ七夕さまの日であったと言われています。

夏の夜空七夕の宵に強く輝くこの星は茂平、お新の一年振りに合う事の出来た喜びの姿だと言い、川の岸に建てた供養碑を七夕さんと言ってここを通る度に人々は手を合わせました。

そしてこの川を天の川と呼びました。

茂平とお新の純愛、これお浄化させ天の神、牽牛織女の七夕としてお祭した昔の人の心のあたたかさ、あれもこれも今では忘れられて比翼塚を見てもその由来を知らず知ろうともしない。

これが新しい世界の空気であろうか、感慨無量である。

御協力頂いた大迫政人さん。渡辺需さん。猿押政夫さんに心からお礼申しあげます。

平成七年九月吉日

奥畑の里にて

藤広繁吾